

# ゆるふわ農家の 文字化けスキル



試読版

・プロローグ ～異世界転移で農家召喚～

俺の名前は平山達也ひらやまたつや二十九歳。ブラック企業に勤めるアラサーだ。

で……どうやら俺は異世界転移というやつに巻き込まれたらしい。

休みの日に趣味の山登りに行ったんだ。そして、帰りに街中を歩いていると突然地面に魔方阵まほうじんが浮かび上がった、気が付けば――

「おお、よくぞ現れた伝説の勇者よ」

お決まりのセリフとともに、気がつけば俺は玉座ぎょくぎの間  
の王様の前にいた訳だ。

毛の長いフカフカの赤絨毯じゅうたんに豪華な調度品が所狭しと  
並んでいて、甲冑かっちゆうを着込んだ兵士が壁際に何人も控えて  
いる。

そして、周囲を見渡せば茶髪やら金髪の……高校生の  
不良グループっぽいブレザーを着崩したガラの悪い男女  
もいた。

まあ、こいつらも俺と同じ境遇なんだろう。

「ここはどこなんだ？」

不良グループのリーダーっぽい歯抜けの金髪が王様に  
尋ねる。

「ここはアイリス王国——我は王じゃ。実はこの世界は危機に瀕ひんしておつてな」

王様が言うには、この異世界では百年に一度魔物が氾濫はんらんするらしい。

で、その度に国や町は蹂躪じゅうりんされて扉の近隣は壊滅的な打撃を受けるらしい。

氾濫する魔物は非常に強力とのことだ。

この世界の騎士団やら冒険者ギルドやらの防衛手段では到底間に合わず、勇者召喚という手段で対抗するのが常だそうだ。

地球からやってきた勇者は超強力なスキルの数々を所持していて、それはもうとんでもない力を発揮するとい

う。

「これがスキルプレートじゃ。お主らが現在所持しておるスキルが書かれておる」

王様から白銀に輝く縦五センチ×横十センチほどの板をもらおう。

俺と、そして不良グループの男女五名分で都合六枚だ。

「おおっ！ 何かよく分かんが勇者の雷撃らいげきとか書いてるぞっ！」

リーダーと思しき金髪歯抜けが嬉しうれそうに叫んだ。

「ふむ。お主が……伝説の勇者のようじゃの。攻撃の全てに勇者の力である雷神の力が宿るチートスキルじゃ」

「俺は賢者けんじやの悟りさとって書いてあるぞっ！」

今度は茶髪の長髪がそう叫んだ。

「攻撃魔法も回復魔法も最初から中級魔法までを使いこなせるスキルじゃ。訓練を積みれば現存する全ての魔法……いや、オリジナルの極大魔法までを扱あつかうことができ  
るのじゃ」

「私は聖女せいじょの福音ふくいんって書いてるっ！」

「俺は武神ぶしんの拳こぶしって書いてるぜっ！」

とりあえず、みんな本当にチートくさいスキルを□々にしている。

で、俺のスキルプレートは……おいおいマジかよ。

「おい、そこのリュックサック背負ってるオッサン？  
オッサンのスキルプレートにはなんて書いてあるん

だ？」

オッサンって……なんなんだよこの金髪歯抜けは。俺はお前よりも十歳は年上だぞ。

と、そこで一同の視線が俺に集まってきた。

「ああ、俺のスキルは——農作物栽培って書いてるな」  
そうして、一同がフリーズした。

「……え？ もう一回言ってもらってもいい？」

「俺のスキルは農作物栽培だ。他にも農具取扱とか書いてある」

「……え？」

一同のフリーズが続く。

いや、そんな反応されても、農業系のスキルしか書い

てないもんよ。

他のスキルは【壹、纏包ヲ羅イ纏纏纏工皂筌】とかで文字化けしてるし。

そうして、しばしのフリーズのあと——

「ふっははっ……ハハハハハっ！　おいおいこのオツサン闘う為に異世界に呼ばれたのに職業が農家かよっ！　ヤベエっ！　マジでウケるっ！」

「ひゃっふっ……うはははははっ！　おいおいマジかよっ!?　勇者召喚じゃなくて農家召喚ってつか？　とんでもねえオチだな」

「マジでウケるんだけどーっ！　闘う農家って……はははっ！」

不良グループたちは俺を指さしながら、晒し者のように笑った。

本当にガラも頭も悪い奴らだな。

初対面の年上にする態度じゃねえだろ。

と、そこでコホンと王様は咳せきばらいをした。

「それでは、これからお主たちには帝都に向かってもらう。そこで訓練を受け、次元の歪ひずみによる魔物の大反乱に備えるのじゃ」

——翌日の夜。

俺たちは大森林で野営やえいしていた。

帝都までは大森林をまっすぐ歩いて一日半とのことだ。

方角については魔法の方位磁石をもらっていて、それの指し示す通りに歩いていけばよいという話だ。

で、この森は実はダンジョンの一種で、超強力なモンスターの巣窟そうくつという話だ。

帰らずの森とか呼ばれているヤバい場所らしいな。

それで今、俺たちが普通に歩くことができているのは王国を出る前に、高名な聖職者が魔除よけを施してくれたおかげだ。

曰いわく、四十八時間はこちらから刺激しない限りは魔物と遭遇そうごうすることはないって話だ。

そんなでもって、農業スキルしか持っていない俺はどうにも勇者様ご一行には嫌われたみたいで、誰も口をきい

てくれない状態となっている。

仕方がないから連中が野営している場所から、少しだけ離れたところで寝袋にくるまって……その日は眠りについた。

☆  
★  
☆  
★  
☆  
★

「オッサンは寝たようだな」

歯抜けの少年が達也の様子を窺うかがいながらそう言った。

「で、どうするのよ宮本みやもと? 支度金したくぎんは一人金貨百枚って

話でしょ?」

金髪ミニスカートの少女がうんざりと肩をすくめる。

「ああ、役立たずのオッサンにどうして金を公平に分配しなきゃいけないんだって話だし、訓練を終えてから俺たちは勇者の装備を探さなければいけないって話だ」

「うん。転移者だったら誰でも装備できるとって話だよ  
ね」

「とんでもない性能の装備揃いで、戦闘での生存率は跳ね上がるって話だよな。装備を発見すれば、ある程度はオッサンにも公平に分配もしなきゃいけないーだろう」

「そうして金髪ミニスカートの少女は寝ている達也の様子を窺いながら、ひそひそと声を小さくした。

「……オッサンって邪魔じやまじゃね？ 今までの転移者の中には死んだ人もたくさんいるって話だよね？」

「ああ」と金髪歯抜けは頷いた。<sup>うなず</sup>

「これはゲームじゃねえ。生き死にはリアルみたいだ。そして、俺らは友達だから公平に色んなものを分配するのは当たり前だ。でも、オッサンは違う」

「しかも農家で役立たずだしね」

よし……と、金髪歯抜けは頷いた。

「みんな——オッサンが寝ている間にここを離れるぞ？」

と、そこで肩までの黒髪の少女が呟いた。<sup>ささや</sup>

「いや、でも……そんなの……」

「お？ どうしたんだよマユ？」

「ここって超高レベルの魔物の巣窟で、魔除けの効果も

四十八時間なんでしょ？ 方位磁石も一個しかないし、魔物に襲われなかったとしても……迷って野垂れ死にするのは確定だし……」

金髪歯抜けはその言葉で「ハア？」と呆けた表情を作った。

「だったらオッサンを連れてくのか？ 俺たちの物資をオッサンに恵んでやるのか？ 俺たちの生存率を下げたまで？ そんなの冗談にしても笑えねえぞ？」

「いや、それはそうなんだけどさ……」

「だろ？ さすがの俺でも邪魔だからって直接に殺つちまうのは後味が悪い。だから……置き去りだ」

「直に殺すの……変わらないじゃん」

「そもそもあのオツサン……勇者じゃなくて農家だろ？俺らとは違う人種のクソゴミなんだよ」

その言葉で黒髪の少女は何かを考えて、そして達也の寝袋の方角に視線を向ける。

「……ごめんね……おじさん」

そうして金髪の歯抜けは満足そうに頷いた。

「よし、水も食料も全て引き揚げて……移動するぞ。オツサンに残しても仕方のないものだろうしな」



翌朝。

朝日と共に目を覚ました俺は絶句した。

「あいつら……やりやがった」

高校生たちが野営していた場所は引き払われていて、  
王様が用意してくれた水も食料も金も……全て消えてい  
たのだ。

## ・農家の文字化けスキル

さて、大森林である。

見渡す限りの大森林……っというか、山々が見えるので山岳地帯か何かか？

そんな訳の分からないところで、俺は一人ポツンと佇たたずんでいた。

ほとんど遭難そうなん状態っというか魔物も出るらしいし、遭難よりも明らかにヤバイ。

「まずは装備の確認……だな」

寝袋  
水筒すいとん

ペットボトル

ナイフ

ライター

片手鍋なべ

皿

塩コショウ

パン

チョコレート

レトルトカレー  
(固形ルー)

主だったところはこんなもんか。

とりあえず、山歩きを終えての家への帰りの装備そのままだ。

食料は一日分ももたないが、何よりも水がヤバい。

都合千五百ミリリットルだが、これから歩き回るだろうことを想定すると一日持たないだろう。

——水もなければ飯もない。オマケに多分、魔物の危険までも心配しなければいけない。

王様曰く、<sup>いわ</sup>人里は地図無しで行ける距離ではないとの

ことで、その場所も方向も分からない。

方向すらも分からない状態でやみくも闇雲に歩いてても、すぐに水分と食料不足で死んでしまうのは間違いない。とりあえずはこの近辺でサバイバル生活をしながら、少しずつ周辺地理の把握をしていかなないといけないだろう。

そうして俺は深いため息をついた。

☆  
★  
☆  
★  
☆  
★

当面の優先順位としては

1 水の確保

2 住居の確保

3 食い物の確保

以上となる。

飯は一週間程度なら食わなくても死にはしないが、水は二〜三日でアウトだ。

で、住居の確保は既に終了している。

と、いうのも置き去りにされた場所から少し歩いたところどうくつに洞窟があつたんだよな。

高さは二メートルほどで奥行きは七メートル程度。

洞窟内を見渡して、とりあえずの寝床ねどこにしようと決めた俺は、まずは枯れ木と草をかき集めた。

次に洞窟の中で枯れ草と枯れ枝を燃やした。

これは先住の虫や小動物を燻<sup>あぶ</sup>りだすためで、これをやっていないと夜は虫が気になつて眠れたもんじゃないだろう。

「さて、あとは水だな……」

洞窟を発見する前にこの辺りを散策した時、川を確認している。

とはいえ、若干濁<sup>にご</sup>っている水質で……そのまま飲んだらアウトくさい小汚い川だったんだよな。

ろ過した上で沸騰<sup>ふっとう</sup>消毒<sup>しょうどく</sup>は必須<sup>ひつす</sup>だとは思っただけど、俺はろ過の方法は知らないんだ。

「はたして飲めるのかこれは……」

先ほどペットボトルになみなみと汲<sup>く</sup>んでおいた泥水を

眺めながら、俺は小首を傾げる。

とりあえず、しばらく置いておいて、不純物が重力に従ってペットボトルの底に沈殿するのを待つしかないんだろうが……。

「こういう時にネットが使えればな……」

【スキル…ネット検索レベル10が発動します】

「使えるんかいっ！」

文字化けスキルのうちの一つはこれだったみたいだな。

【なお、スキルレベルは5がマックスで、10は限界突破レベルとなります】

俺はリュックサックから携帯を取り出して電源を入れてみる。

「スゲエ……電池残量∞ってなってる……。電波も良好みたいだ」

スキルレベル10は限界突破だって神の声も言ってたし、まあ……チートってことなんだろう。

とりあえず、これはありがたい。

そうして俺はペットボトルを利用したろ過の方法を検索した。

ハンカチかタオルがあれば、あとは自然にある砂利とか土でどうにでもなりそうな感じで、実際にやってみたら綺麗な水が取れた。

そうして、その水を片手鍋で沸かして飲んでみた。  
水は美味おいしかったし、そのあとに腹も痛くならなかつた。

「やっぱりネット検索システムは最強だな」  
こうして俺は、とりあえずの水問題と住居地問題をク  
リアしたのだった。

☆  
★  
☆  
★  
☆  
★

さて、あとは食料である。

とりあえずは木の実の採取や動物を狩猟したり……な  
んだらうな。

と、洞窟から抜け出て森に何か食えるものがないかと俺が散策をしていた時――。

「死体……か」

森の中で白骨死体を見つけてしまった。

正直、気分の良いものではないが、一応拝おがんでおく。

「しかし、どうして農具を？」

近くを見ると、朽くちた小屋もあって荒れ果てた畑のようなものもある。

どうやらこの人はこの近辺で農業なりをやっていた人なんだろう。

で、農作業中に病かたわ気か何かでこの人は倒れたらしく、死体の傍かたわらには錆さびたクワがあった。

「いや、明日は我が身だよな」

異世界っていうくらいだから魔物もいるだろうし、  
餓死がしの危険もある。

朽ちた小屋を見ても、食料の備蓄はないようだ。で、  
使えそうな物資も食器類程度しか見当たらなかった。

うーん……荒れた畑を耕しなおして作物を作れたりす  
ると良いんだろうけど……。

畑は雑草だらけで、耕したとしても種もない。

【スキル…種創造レベル10が発動しました。この場合は  
最速でモヤシと判断しました】

どっとうこつちや？

…：…あ、モヤシの種つぽいのが出てきた。

てのひら

掌が光り輝いたと思ったら、気が付けば俺は大量のモヤシの種つぽいのを持っていた訳だ。

どっとう理屈が分からんし、ある意味怖い。とりあえず、これも俺がもらったチートスキルってことか？

えーつと…：…モヤシってのは日光当てずに作るんだよな。

薄暗いところに置いとけば一週間くらいでプランターでできるって聞いたことがある。

まあ、すぐにできる野菜の種であれば、僥倖きやうへいじやうだと思っ

てこの状況を受け入れよう。

そして俺は落ちていたクワを持ってみると――。

【スキル…農具取扱レベル10が発動しました】

「おおっ！ 物<sup>もの</sup>凄<sup>すご</sup>いサクサクいくぞっ！」

どうやらこれもチートスキルらしい。

羽でも振り回しているかのように重さを感じない。

瞬<sup>またた</sup>く間に俺は周<sup>ま</sup>囲<sup>ま</sup>を耕して、モヤシの種を撒<sup>ま</sup>いていく。

で、最後に小屋にあつた木材を組み立てて日陰にしておいた。

そうして最後に神の声が聞こえた。

【スキル…農作物栽培レベル10が発動しました】

ん？　なんだこのスキルは？

作物の成長が早くなるとかそういうことか？

が、そんな疑問には神の声は反応してくれない。

「……つてか、モヤシだけじゃ芸がないな」

モヤシの次は、栄養素の中で一番大事な糖とうぶん分……つて

いうか炭水化物だな。

短期間で育てることのできる炭水化物を多量に含んだ野菜といえは、根野菜だ。

意外に思うかもしれないが、レンコンやニンジンつてのは糖分つていうか、炭水化物がたくさん含まれている

んだな。

とりあえず、米や小麦の穀物類の代用として問題なく使えるのは間違いないだろう。

【スキル…種創造レベル10が発動しました】

「よしよし、エンジンの種っぽいのが出てきた」

小麦や米も将来的には栽培していきたいが、それはちよつと時間がかかりそうなのでいったん保留だ。

と、そんなことを考えていると、俺の背中に冷や汗が流れた。

「あ……ヤバイ」

と、いうのも本当にヤバいモノが樹木の陰に見えたのだ。

そう、俺の前方三十メートルほど先に見えるのは——  
巨大な狼だ。おおかみ

シベリアンハスキーを五倍くらいにデカくした感じの狼で、シルバーファングとかいう名前が似合いそうな見た目だな。

っていうか、どう見ても魔物だろ……魔除よけの効果はもう切れたのか？

おいおいどうすんだよこれ。

とりあえず俺がクワを構えた時——

——目があった。

動物園の虎とかよりもデカいのと、鉄格子なしで目があつたのだ。

当然、俺の心臓は止まりそうになる。背中から冷や汗がドバつと出てきて、腰が抜けてしまいうそうになる。

しばらくのお見合いのあと、狼はヨダレをボトボトと垂らしながらこちらに駆け出してきた。

「うわアつ！ 来るなつ！ こっち来るなつ！」俺は威嚇のためにはやたらめつたらにクワを振り回すが、巨大狼にそんな威嚇は通用せずに大口が俺の眼前

に迫ってくる。

【スキル…農具取扱レベル10が発動しました】

ん？ スキル発動？

ヒュインっ！

風斬り音と共に狼の脳天にクワが突き刺さった。

と、同時に心臓から熱い何か——直観的にそれは魔力的な何かだと分かったが——が、クワ……そして狼の体内に向けて流れていくのが分かる。

——ちゅどーん。

爆発音が鳴った。

狼の体内で魔法攻撃的な何かが炸裂さくれつしたということだろう。

「農具取り扱あつかいってレベルじゃねーぞ……」

爆裂四散した狼の肉片が周囲に飛び散っていく。

炭化たんかした肉片を眺めながら、しばし俺はその場で茫然ぼうぜんとした。

そうしてしばらく経たって、俺は魔物の肉とかも食えるんじゃないかと思いついた。

が、狼の肉片を拾ってみると、完全に炭化していて、とても食えたもんじゃない。

「とりあえず、魔物系で食料を得るのは難しそうだな」と、俺は深いため息をついたのだった。

☆  
★  
☆  
★  
☆  
★

数時間ほどで十メートル四方程度の畑を耕し、俺は腰を落ち着け水筒に口をつけた。

「……腹減ったな」

既に持ってきていた食料はほとんど尽つきている。

まあ、厳密にいうとレトルトカレーの固形ルーは最後の食料として残しているんだけどな。

どんなに不ま味ずいものでもカレーでごまかせば何とかな

るってのを聞いたこともあるし、調味料という意味でも最終手段だろう。

食料探しのために、とりあえず周囲の探索はやってはいるんだが、へビしかいないんだよな。

「しかし、本当に腹が減った」

そうして、本当に最後の携行食であるチョコレートを□に放り込む。

これで頼みの綱は……いつ収穫できるか分からないモヤシとニンジンのみとなつた。

「つつつても、へビしかいねえもんな……」

岩場でちよこちよこ見かけるへビを思い出しながら、深くため息をついた。

せめて食えるもんなら……と、そこで俺は「あつ……」と息を呑んだ。

——そういえばへびって食えるんだよな？

確か、へび肉の味はタンパクな鳥みたいな感じ……って話だ。

そうして俺はスマホを取り出して速攻でネット検索を始めた。

「なるほど」

ここで今まで大量に見かけてきたへびは多分食用だ。日本でシマへびっていわれているのによく似ている。

「お次はへびの捕まえ方だな……」

そうして数分間俺はネットの海を泳いで「おいおいマ

ジかよ……」と独り言ちた。

どうやら、ヘビは髪の毛を燃やせば集まってくるらしい。

でも、どうして髪の毛で？

頭の中がクエスチョンマークで満たされたが、理由を調べて疑問は氷解ひょうかいした。

髪の毛を燃やす音が、ヘビ同士で交尾こうびをする時の音にソックリらしいんだよな。

と、まあ、そんなこんなで俺はナイフを取り出して伸び放題になっていた髪の毛の散髪さんぱつを始めた。

いや、散髪っていうかムシるのに近いかな。

そうして、髪の毛をビニール袋に持った俺はヘビのい

る岩場へと向かおうと歩き始めた。

そして、ふと畑を見てみると――

「もう芽めが出てきてる……」

まだ半日も経過してないのに……と、俺は農業チートスキルの凄まじさすさを実感したのだった。

――ちなみに、へビはすんなりと二匹取れた。

☆  
★  
☆  
★  
☆  
★

翌日の昼――。

「モヤシも食べごろな感じだし……へビ鍋にしよっ」  
モヤシは一日で食べごろになった。

っていうか、栽培速度が尋常じゃなくて軽く引くレベルだ。

それはさておき、へビの味は鶏肉とりにくっぽい感じなので鍋にするとそこそこイケるだろうという判断だ。

お湯を沸かして、収穫したモヤシとへビ肉と塩コショウをぶっこむ。

で、水炊きみずたにして実食してみる。

味が薄かったのでお湯から取りだしたあとに再度塩コショウを振ると——そこそこイケた。

塩コショウで食べる、鳥の水炊きみたいな感じかな。

っていうか、モヤシが超シャキシャキしててめっちゃ美味うまかった。

「モヤシでここまで美味しいとなってくると……ニンジンも楽しみだな」

洞窟の中で寝袋に入りながら、他にどんな野菜を育てようかと、色々と考えているうちにその日は寝入ってしまった。

## ・手乗りウサギ

で、翌日。

「ニンジンも今日からそろそろ食べごろだな」

今日はヘビとモヤシとニンジンで鍋なべにしよう。

っていうか、そろそろ塩コショウもなくなりそうだな。

調味料がなければ、食材を煮ても焼いても味あじけ気ないも

のになって食事というか、ただの栄養補給になっちゃうんだよなア……。

まあ、とりあえず今は食えるだけありがたいと思うこ

とにするか。

そうして、俺は初の実食となるニンジンをお口に入れてみる。

「あ、すげえ甘い」

茹<sup>ゆ</sup>でたニンジンはいままで食べたことのないような甘さで、糖<sup>とう</sup>度<sup>ど</sup>が物<sup>もの</sup>凄<sup>すご</sup>く高<sup>たか</sup>かった。

上<sup>う</sup>手<sup>ま</sup>く加工すればこれから砂糖も作れるかもしれないと思うようなレベルだ。

で、モヤシはやっぱり物凄<sup>もの</sup>い<sup>すご</sup>いシャキシャキしてて美味<sup>う</sup>ま<sup>ま</sup>かった。

と、チート野菜の美味<sup>お</sup>い<sup>い</sup>しさに感動している時、俺の目の前に小動物が現れた。

——小動物……っというか、小人だ。

身長は成人男性が掌を<sup>てのひら</sup>広げて中指の先端から掌の一番下までの大きさくらい。

数字でいうと十五センチ〜二十センチくらいの大きさかな？

絵本の小人とか妖精さんが着てそうな服の露出度をちよつと高くした感じで、更にウサギ耳がついている。腰までの銀髪に青色の瞳<sup>ひとみ</sup>で、顔は西洋風でビツクリするほどに整っている。

「……すげえ……ファンタジーだ」

今まで、魔物系とは出会ったがこれは可愛<sup>かわいい</sup>いほうのファンタジーだ。

大正義のほうのファンタジーだ。

ああ、俺はやっぱり異世界転移したんだな……と、しみじみそんなことが頭に浮かぶ。

と、そこで俺と小人ウサギとの目と目があった。

「わ、わ、わっ！ わたっ！ 私は二ンジンを盗む悪いウサギさんではないですよーっ！」

ちよこまかと手を振って首をブンブンと振っている。

コミカルな動きで可愛らしいことこの上ないな。

「まあ、盗む気はなさそうだが……二エンジンは欲しい訳なんだよな？」

よくぞ聞いてくださいましたとばかりにウサギは何度も大きく頷うなずいた。

「私たちは森にすまうウサギの一族なのですー。大きな人からは手乗りウサギと呼ばれてますですー♪」

「手乗りウサギ……。それで？」

「手乗りウサギは成人の際に儀式ぎしきを行うのですよー♪」

「儀式？」

「一人で旅に出て……。巣穴に財宝をもたらすことで一人前として認められますー♪ つまりは、立派なニンジンニンジンを里に持ち帰らなければなりませんよー♪」  
なるほど。

とりあえずニンジンニンジンはコイツらの中では貴重きちょうじゅうな物な訳だな。

でも、ニンジンニンジンみたいなもんを財宝と表現するってど

ういうことだ？ と、そのまま考えて俺は「ああ……」  
と頷いた。

まあ、確かに野生のニンジンなんてあんまり聞いたこと  
もねーもんな。

「なるほど。事情は分かった。つて、どうしたんだ？」  
見ると、脇わきに置いていたニンジンの束たば……さつき俺が  
収穫したニンジンを見て、手乗りウサギはヨダレをボト  
ボトと垂たらしていた。

「……」

「……」

耳しっぽと尻尾しっぽをピョコピョコと動かし、手乗りウサギは二  
ンジンぎょうしを凝視ぎょうししている。

「はうう……こんな立派なの……見たことないです……」

朝飯の残りの茹<sup>ゆ</sup>でニンジン<sup>ゆ</sup>を皿にのせて、目の前に差し置いてやる。

スンスンと手乗りウサギは茹でニンジンの香りをかいで——ポトポトと垂らしているヨダレの量が増えて、それはまるで滝のごとくとなった。

「食っていいぞ」

言葉と同時に、マツハで食いついた。

パクつと——口かじると、手乗りウサギは大きく目を見開いた。

そして——パクパクパクつと猛烈な勢いで食べ始め

る。

「お、お、美味しいですーっ！　こんな初めてなので  
すーっ！　っていうか甘ーーいのですっ！」

まあ、砂糖が作れるんじゃないかねーかってレベルで甘かつ  
たからな。

俺もこのニンジンには素直に驚いた。

と、茹でニンジンを食べ終えた手乗りウサギは、再度  
脇に置いてあるニンジンの束に視線を移した。

「……こんな立派なニンジンを持っがいせんて帰ることができた  
なら……私は英雄として巣穴に凱旋がいせんできるのですのー

♪」

物欲しそうな目で手乗りウサギはそう言った。

「持っていくか？」

「え？」

信じられないとばかりに手乗りウサギは大きく目を見開く。

「こんな立派な財宝を……食べ残しでもないのに分けてくれるですかー？」

どうやらこいつらの中ではニンジンきしょうひんはガチで希少品らしいな。

「だから、持っていくか？」

コクコクと何度も何度も頷く手乗りウサギ。

尻尾もフリフリしていて本当に可愛いな。

と、そんな感じで——ツルで束ねた三本のニンジン

を背負って、満面の笑みを浮かべながら巣穴へと向かっていった。

☆  
★  
☆  
★  
☆  
★

その日の晩、俺は途方に暮れていた。

——いかん。へビが獲れない。

罨わなに使う髪の毛の量が少なかったのか？

ともかく、やつら一匹も出てこない。

モヤシとニンジンだけじゃ流石さすがにいつまでもは持たん

だろう。

タンパク質が絶望的に不足しちまうぞ。

「さあ、どうするか……」

豆類はタンパク質が豊富って話だし、動物性タンパクはいったん保留で、早く取れる豆の栽培でも始めるか？と、そんなことを考えながら茹でニンジンを食べていと——

「え？」

藪やぶの中から手乗りウサギが十名飛び出してきた。

「大きな人なのですよー♪」

「あれがなのですかー？」

「あれがニンジンのお大きな人なのですー？」

「ニンジンなのですかー？」

「甘いニンジンなのですかー？」

十匹の手乗りウサギ。全員が美形というか顔が一緒だ。と、それはさておき——俺は絶句した。

「イノシシ……だと？」

手乗りウサギたちはワイヤーを引っ張りながらこちらに向かってきている訳だが、そのワイヤーで引きずって  
いるものが凄かった。

何せ、推定数十キロ……下手すれば百キロ超えてそう  
なイノシシ引きずってんだからな。

っていうかコイツ等、見た目とは裏腹に力あるんだな。

「そのイノシシはなんだ？」

「お礼なのですよー♪」

「甘いニンジンのお礼なのですよー♪」

「お礼のお礼でニンジンもらうですよー?」

「そうなのですよー。ニンジンもらうですよー♪」

ああ、要は物々交換をしたいって話か。

「しかし、イノシシなんてどうやって獲ったんだよ……?」

そこでエツヘンと手乗りウサギが薄い胸を張った。

「私たちは狩猟民族なのですよー」

耳もピンと立っていて、本当に愛らしいなこの生き物。

ってか、暗くてよく見えなかったが……半分くらいの

手乗りウサギは小さな槍やりで武装していて、イノシシは

滅多めった刺たしざの大惨事だいさんじとなっている。

「えっ? ウサギって草食性じゃねーの? ニンジン欲

しがつてたし……」

「二ンジンはあくまで嗜好品しこうひんなのですよー。基本は肉食なのですー♪」

なるほど、こちらの世界のウサギは雑食だったらしい。っていうか、肉食ウサギって響きも結構すげえな。

「と、いうことでー私たちはここにすみますですからー。これからはイノシシさんと二ンジンの等価交換なのですー」

と、まあそんなこんなで同居人が一気に増えた。

そんでもって、動物性タンパク質の問題も同時に解消したらしい。

さて、手乗りウサギである。

基本的にはこの生き物は盗みもしないし悪さもしない。ニンジンさえ与えていれば獣も獲ってきてくれるし、雑用事もやっつけてくれる。

で、俺にも時間ができるとなりました。

肉の心配がなくなっただけの一番大きいかな。

元々、そろそろ洞窟暮らしもアッってなもんで、白骨体が住んでいたであろう朽ちた小屋を修繕しようかと思っていたところだ。

小麦と米は既に植えているが収穫までは一〜二か月つてところだろう。

この辺りを収穫し終えた上で、人里を見つげるための

探索を本格的にやろうと思っっている。

が、やはり数か月もこの場所で過ごすのだから、ジメジメとした洞窟というのはいただけない。

とりあえず、クワで材木を切って組み立てていく。っていうか、このクワ……ヤバい。

農具取り扱あつかいのスキルの影響なんだろうが、刃物としても頭おかしいレベルで、サクッと木が切れる。

とはいえ本来の用途とは違うので板の成形にはかなり難儀なんぎした。

釘くぎがないので困ったが、手乗りウサギたちが釘を作ってくれた。

彼女たちは人間の冒険者の死体のことを鉾山と呼んで

いて、防具や武器から金属製品を加工するらしい。

ウサギだけあって歯が硬くて鋭いのと、火を扱う技術もあるのも、簡単な金属加工ならお手のものとのことだ。で、釘を提供してくれたただけじゃなくて家屋作製以外でも、木材をくりぬいて皿やコップの作製も手伝ってくれた。

体が小さいから細かい作業なんかは人間よりもできるとし、かなり器用なようだ。

それでいて、お手伝いしてくれた時には二ンジンを一本あげていれば大喜びしてくれる。

まあ、率直な感想としては――

——こいつら便利だなということだ。

と、そんな感じで丸一日で掘っ立て小屋と倉庫ができあがった。

小屋の広さはワンルームマンションくらいで、先人の残した食器や鍋なんかも綺麗きれいに洗ったり修繕しゅうぜんしたりで、調理や食事をする分にはかなり充実かんがいしつつある。

一気に文明も進歩して、色々いろいろと感慨かんがい深い。

ちなみに、倉庫ぐらなんだが、ネズミなんかの泥棒どろぼう対策で手乗りウサギの精鋭せいえい一名が交代制で見張りをしてくれるというセキュリティ付きのものとなっている。

ってか、やっぱこいつら便利だな。

で、しばらく過ぎした洞窟からの引っ越しも終えて、その日の晩は俺は最後のカレーの固形ルーを使って御馳走ごちそうを作った。

まあ、引っ越し祝って奴で、イノシシの肉と、大量のニンジンを入れた特製カレースープだ。

「とっても美味しいですよー♪」

「っていうかカレーニンジン……マジでヤバくね？」

「おいしーよねー」

「大きい人は神ですかー？」

「っていうか神じゃね？」

「間違いなく神なのですー♪」

猛烈な勢いでカレーがなくなっけいき、気が付けば俺

は一口も食べないままに完食されてしまった。

食欲を満たした手乗りウサギたちはすぐにその場で眠りだしていき、そのうちの一人が俺の膝ひざの上に乗ってきた。

そうして、クタリと俺の膝の上で眠りに入ろうとする。こいつらが俺に懐なついているのは犬猫いぬねこの餌え付けづに近いものがあるんだろう。

だから、やはり俺も犬猫を扱うように首筋や背中うしろの辺りをマツサージしてやった。

首回りとか耳とか尻尾とか……モフモフ部分もあるし、触り心地も良い。

と、尻尾の先端辺りを触ると、手乗りウサギはビクン

と体を震わせた。

「んっ……！」

「どうしたんだ？」

頬ほおを朱色しゆに染めて、手乗りウサギはトロンとした表情でこちらを見てくる。

「……もつとなのですう」

言葉通りに、再度、尻尾の先端辺りを触ってやる。

「あっ……」

湿った吐息といきと共に、そのまま手乗りウサギはクタッと俺の膝の上に頬をこすり付けてきた。

面白くなってきたので、クリクリっつと更に尻尾の先端辺りを弄いじってやる。

すると再度ビクリと手乗りウサギは体を震わせた。

そうして、彼女は――

「すゝすゝす……凄いいテクニクなの……です……」  
それだけ言うと、疲れ果てたかのように膝の上で寝てしまった。

で、翌日――。

朝、起きると手乗りウサギたちが見当たらない。

倉庫を見ても、やはり警備中の手乗りウサギがない。

これはどうということだ……？ と、そこらを探し回つてもいない。

まさか……と思つてニンジンの貯蔵箱と畑を見るが、

盗まれた訳でもない。

「本当にどうということなんだよ……」

流浪るろうの種族とかそういうことなのか？ 別れも告げず

に去っていったとか……そういう感じなのかな。

まあ、いなくなっただ連中を探してもどうしようもない

ので、俺はその日は農作業とイノシシの解体・燻製くんせい作業

に勤いそしんだ。

ぶっちやけると、かなり俺的には寂さびしかったんだが、

それを言っても仕方ない。

そしてその日の夜――。

「ウチの子たちがお世話になりましたですー♪」

えらい美少女が、手乗りウサギを三十人引き連れてやってきた。

いや……手乗りウサギを人間の大きさにした感じ……  
っていうかそのままの兎人だ。

見た目は十五歳前後くらいで、日本でいえば中学生か高校生くらいだろうか。

胸は小さいが、形は良さそうな感じだな。

言うまでもないが、とんでもなく可愛い。

「貴方は？」

「うふふ。私の名前はソーニャです。じゅうみえでも小兎人族こじうまぎじんぞくの女王さまなんですよ。で、群れの中で王さまだけが……この大きさにってワケなんです」

「で、どうして……今日はここに？」

「巣穴の引っ越しなんですよ」

「引っ越し？」

「とんでもないニンジンの生産地を発見して、そこに住む者とも友好関係を築けそう……っていう話をお聞きしましたですよ♪」

ああ、なるほど、そういうことか。

ってか、本当にニンジン好きなんだなコイツ等。

「俺としても肉を提供してくれるなら、ニンジンのお代で良いなら文句はねえけどさ」

そうして、ソーニャはニヤリと笑った。

「あと、この子から……聞いたのですけれどね？」

ソーニヤは昨日、俺の膝の上で寝ていた手乗りウサギを指さした。

「……凄いテクニックを持っているんです？」

舌なめずりしながら、ソーニヤは妖艶ようえんな目つきで俺の足元から頭までに、舐なめつけるような視線を送ってきた。

「……え？」

「是非ぜひとも一度……試してみたいですが」

「あ、いや……」

「ん？ どうしたんです？」

「ソーニヤはちよつと……見た目的に問題が……」

まあ、見た目中学生で、いいところ高校生くらいだもんな。

色々と問題があるのは間違いない。

「うふふ。兎族は長命なんです。つまり私は——二十歳なんですっ！」

なら、問題ないな。

と、そうして——その日の夜、色々あった。

ちなみに、ウサギさんは年中発情中で動物界でも屈指くっしの性欲らしい。

で、結論から言おうと——

——じわせい噂通りにウサギさんは絶倫ぜつりんでした。

GAノベル『ゆるふわ農家の文字化けスキル』 試読版は「ここまで！」

続きは、5月15日頃発売の本編でお楽しみください!!